

# 27T-pm02S

糖尿病患者の治療行動におけるアドヒアランス関連因子に関する研究—内的要因としての病識に着目した探索的検討—

○富永 佳子<sup>1</sup>, 青森 達<sup>2</sup>, 早川 智久<sup>2</sup>, 井澤 美苗<sup>2</sup>, 望月 真弓<sup>1,2</sup> (1慶應大院薬, 2慶應大薬)

**【目的】**糖尿病患者の治療中断や服薬アドヒアランスに影響する患者の内的要因を明らかにする。**【方法】**2型糖尿病と診断され、現在薬物治療を行っている調査パネル登録患者で、かつて治療を中断したことがある者(中断あり群)或いは中断したことがない者(中断なし群)を対象とし、治療中断・再開の理由に関する調査を行った(2017年4月、自記式質問紙法)。その結果に基づき、患者の内的要因となる疾患および治療の認知・理解(病識)に関する質問票を作成し、服薬アドヒアランス、自己効力感、HbA1cなどの項目を含む追加調査を行った(2017年9月、同法)。中断あり群については、現在の病識に加えて中断した当時の病識も後ろ向きに調査した。病識に関する回答結果をもとに探索的な因子分析を行うとともに、中断あり群となし群の比較、中断あり群における中断当時と現在との比較、服薬アドヒアランスとの関連性を分析した。**【結果】**有効回答は365例(中断あり群164例、なし群201例)、男性75%、平均年齢55.3歳であった。中断あり群はなし群に比べて、有意に自己効力感および服薬アドヒアランス(一部項目)が低く、HbA1cが高かった。中断理由の8割は自己判断に基づくものであり、4割以上で病識が関係していた。病識特性に関する因子分析では3因子が抽出され、これらの3因子は中断あり群となし群の現在の病識の比較では大きな違いはなかったが、中断あり群の中断当時と現在の病識の比較では顕著な違いが見られた。病識3因子は服薬アドヒアランスにも関係していた。**【考察】**中断あり群の回答には思い出しバイアスが影響した可能性はあるものの、治療の継続や服薬アドヒアランスに影響する病識には、複数の要素が関与していることが明らかになった。こうした病識特性を探ることにより、治療中断やアドヒアランス低下のリスク患者の見極めにつながり、患者の状況にあわせた個別化対応に役立つことが期待される。